

カブ

カブはアブラナ科アブラナ属に属する一年生（越年生）植物で、原産地は地中海沿岸から中央アジアあたりである。ダイコンと似ているが、属が違う。主根上部の一部が大きく肥大して球形となり、食用とするほか、茎や葉などの地上部分も葉菜類と同様に利用される。球状の主根が固いため、生食より煮物や味噌汁・シチューの具材として幅広い料理に使われている。ただし、加熱されると一転して非常に柔らかくなるため、ダイコンのようにじっくり煮込む料理には向かない。

農林水産省の 2018 年統計データでは、本邦のカブ栽培面積 4300 ヘクタール、収穫量 11.77 万トン、ダイコンに比べてその栽培面積と収穫量の 1 割しかない。栽培面積が多いのは関東地域である。ただし、上記のデータは家庭菜園などを含まないため、実際の栽培面積と収穫量がさらに多いはずである。

一、カブの生育ステージ

カブは涼しい気候を好み、その生育適温は 15～25℃である。25℃を超えた高温は主根の肥大を抑制して、食味も悪くなるので、その栽培は真夏を避け、春播きと秋播きに分けられる。

カブはその食用主根の大きさにより、大まかに直径 5～6cm の小カブ、10cm 前後の中カブ、15cm 以上の大カブの 3 つに分類されるが、変異が発生しやすいため、各地に主根の形や色が違う品種が多いのも特徴である。

生育期間の短い小カブと中カブは春播きと秋播きの 2 回栽培ができる。春播きは 3～5 月播種、5 月末から 7 月上旬までに収穫する。秋播きカブは 8 月下旬～10 月播種、10 月～12 月収穫する。一方、生育期間の長い大カブはほとんど秋播きで、9～10 月播種、12～2 月収穫する。

カブの生育ステージは栄養成長期と生殖成長期に分けられる。栄養成長期は発芽期、幼苗期、主根肥大期、抽苔期、生殖成長期は開花期、莢肥大期と成熟期にさらに分けられる。ただし、採種用を別にして、通常主根肥大期中期に収穫するので、抽苔期以降は目にかかることがほとんどない。図 1 はカブの生育ステージと各ステージに主に行う農作業を示す。

発芽期は播種から最初の本葉が出たまでの期間である。カブの発芽は気温（土温）により播種後 3～5 日で、気温が高いほど発芽が早くなる。地上に子葉が出て、本葉が展開するまでに苗の生長に必要な養分は種子の貯蔵養分に依頼して、外部から水分だけを吸収する従属栄養期である。

幼苗期は初の本葉が出てから 5～6 枚の本葉が展開して地中の主根が肥大し始まるまでの期間である。本葉が展開してからは根が土壌から養分を吸収し始め、従属栄養から独立栄養に移行する。幼苗期の植株は生長が緩やかで、葉色が淡く、主根が細長く伸びただけで、ま

だ肥大していない。

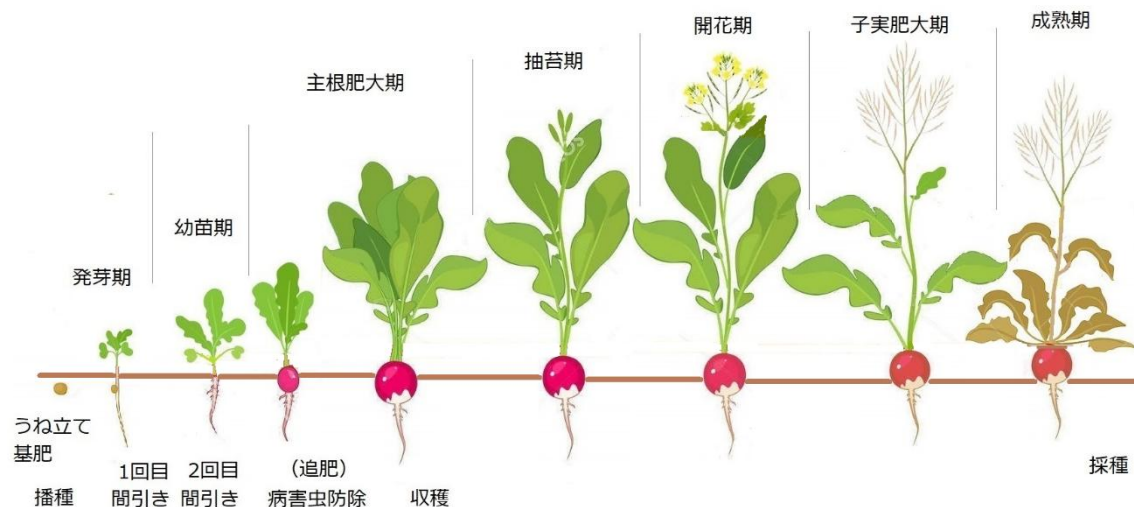


図 1. カブの生育ステージと主な農作業

主根肥大期は5～6枚の本葉が出てから抽苔までの期間である。葉色は次第に濃くなるが、茎の節間がほとんど伸長しないため、地上茎が極端に短く、葉が放射状に主根の首から直接出てくる状態である。品種と生育条件に応じて、小カブと中カブは大体15～30枚、大カブは30～50枚の葉が発生する。この時期では地下にある主根の一部は葉の光合成産物を蓄え、次第に丸く肥大して球形になる。15～20枚葉までは根の肥大が緩やかであるが、20枚の葉が展開してから一気に肥大していく。ただし、25℃以上の高温は主根の肥大を抑制するので、種まき時期などを調整して、梅雨明け後の真夏高温シーズンを避けるべきである。

通常、主根肥大期中期に入ってから収穫する。時期としては小カブは種播き後40～50日、根の直径が5～6cmになったら、収穫適期である。中カブは種まき後50～70日、根の直径が8～10cmくらいが収穫の目安である。一方、生育期間の長い大カブは種まき後80～100日、根の直径が15～20cmくらいが収穫の目安である。収穫が遅れると根が裂けたり、老化してスが入ったりするので、商品価値を高めるには品種に応じて一定の大きさになったら早めに収穫することを勧める。

抽苔期に入ると、主根の肥大が停止し、茎が急速に伸長し、茎に葉柄のない抱茎葉が数枚出て、その伸びた茎の先端に花芽が形成される。この時期になると、根が老化して、中にはスや繊維が多く発生し、食用の価値が完全に失う。

開花期は茎先の花芽が伸ばして総状花序を形成し、花が咲き始めてから、花序の蕾が全部開花したまでの期間である。開花期は14～21日も続き、この期間には葉の生長が終了し、植株の草丈が最高となり、葉面積が最大となる。

莢肥大期は開花がほぼ終了した頃から、莢と葉が黄化して成熟期直前までの期間である。この期間には莢の中に子実が肥大し、植株の乾物重が最大となる。

成熟期は子実の肥大が終了し、子実が莢の中で遊離した状態となる。この時点では通常す

すべての葉が枯れて、主茎の上部から 3 分の 2 の莢が褐色～黒色に変色し、茎は乾いた状態となる。この時期には採種する。

二、カブ栽培の主な農作業

カブ栽培の農作業はその作業順で主に畑の耕起と整地、基肥施用、播種、追肥、中耕・培土、病害虫と雑草防除、収穫と調製・選別である。図 2 は各地域のカブ栽培暦である。小カブと中カブは栽培期間が短く、40～70 日しかないので、高温多湿の真夏を避けて、春播きと秋播きの 2 回栽培ができる。大カブは栽培期間が長く、80～100 日もかかり、主な用途も漬物なので、通常秋播きに限られる。

小カブ・中カブの栽培暦

栽培地域	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
冷涼地 (北海道・東北)			(春播き)	種まき			(秋播き)	種まき		収穫		
中間地 (関東・東海)		(春播き)	種まき			収穫		(秋播き)	種まき		収穫	
温暖地 (四国・九州)		(春播き)	種まき		収穫			(秋播き)	種まき		収穫	

大カブの栽培暦

栽培地域	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
冷涼地 (北海道・東北)								種まき			収穫	
中間地 (関東・東海)									種まき			収穫
温暖地 (四国・九州)	収穫								種まき			

図 2. 各地のカブ栽培暦

北海道や東北のような寒冷地域では春先の融雪が遅いため、小カブと中カブでは春播きが 4 月中旬～6 月中旬に播種して、6 月～8 月上旬に収穫する。秋播きが 8 月に播種して、9 月下旬～10 月下旬に収穫する。初雪が早いので、大カブの栽培には不向きだが、栽培する場合は 8 月上旬～中旬の短い期間内に播種して、雪降り前の 11 月末までに収穫する。

関東や東海の中間地域では、小カブと中カブでは春播きが 3 月中旬～5 月中旬に播種して、5 月上旬～7 月上旬に収穫する。秋播きが残暑の過ぎた 9 月中旬～10 月中旬に播種して、10 月下旬～12 月中旬に収穫する。大カブでは 9 月中旬～10 月中旬に播種して、12 月から翌年 2 月上旬までに収穫することができる。

四国・九州の暖地では、小カブと中カブでは春播きが3月上旬～5月上旬に播種して、4月中旬～7月上旬に収穫する。秋播きが9月下旬～10月下旬に播種して、11月～12月に収穫する。大カブでは9月下旬～10月下旬に播種して、12月下旬から翌年2月中旬までに収穫する。

春播きのカブは幼苗期に10℃以下の低温を一定期間に遭遇すると、花成が誘起され、花芽が形成されるので、その後の高温長日条件で抽苔しやすくなる。従って、春播きは最低気温が10℃以上に上がって、晩霜の恐れがなくなってから種まきを行うか、保温効果のあるトンネル栽培を採用する。害虫の被害を防ぐため、寒冷紗などを使うトンネル栽培は小カブと中カブの生育には有利である。

以下はカブ栽培の具体的な農作業を説明する。なお、カブは病害に対する抵抗性が弱く、同じ圃場での連作を避けるべきである。

1. 耕起と整地

カブは直根性作物で、柔らかく通気性と保水性のよい土壌が適している。土が過湿になると、湿害や黒腐病、根くびれ病、白カビ病が発生しやすくなる。良質のカブを育てるために地下水位が30cm以下で、周辺の圃場（水田）や農業用水路からの浸入水がなく、排水が良く、透水性（水はけ）の良い砂土、砂壤土または壤土質の圃場を選択する。また、生育を良くして、収穫の利便さと降雨後の積水による湿害を防ぐために必ずうねを立てて栽培する。

耕起とは畑の土を耕し、栽培に適した大きさの土塊にして、耕作土層を形成する作業である。耕起は前作物の残渣を土の中にすき込んで腐熟を促進させることや土の中に空気を入れて乾燥を促進し、有機態養分を無機化させる等の役割もある。整地とは耕起された土塊をさらに細かく砕き、播種や移植に適する状態にする作業である。

整地した後、種まきの前にうね立て機を使って、低うねを立てる。うね間100～120cm（うね面約70cm、通路幅約30cm）、うね高10cmの低うねにする。

畑の耕起と整地作業に下記の注意事項がある。

- ① 土壌水分が多すぎると、耕起した土塊が大きく、整地の際に土を細かく砕きにくく、作業効率が悪くなるので、必ず畑が乾燥の状態で耕起作業を行う。
- ② カブは深根性の作物で、耕起深度（耕深）が25～30cmにする。耕深が浅過ぎるとカブの根はりが劣り、生育が悪くなるほか、主根が伸びず、肥大しにくい。また、前作の残渣物が土の表面に露出しやすいなどの問題も発生する。整地のハロ耕深が15cmを目安に行う。
- ③ カブの根は固い土の塊や石、未熟堆肥などに直接に触れると、根が裂けたり、奇形になったりするので、耕起・整地の作業中にこれらの障害物をできる限り取り除く。

2. 土壌 pH 調整と基肥施用

カブ生育の適正土壌 pH が5.5～6.5であるので、pH5.5未満の酸性土壌では pH 調整とカルシウムを補充するために石灰質肥料を施用する必要がある。石灰質肥料を施用する場合は、土壌 pH が7.0を超えないように施用量を適宜に調整する。

カブ 1 作の栽培に必要な施肥量は 10a あたりに小カブと中カブが窒素、りん酸、加里それぞれ 5~7kg、大カブが 8~10kg である。10a あたりに 1500~2000kg の堆肥を基肥として施用する場合は、窒素、りん酸、加里の施肥量が半分まで減らすことが可能である。

小カブは栽培期間が短いので、追肥せず、全量基肥とする。中カブは追肥せず、基肥 1 本化でもよいが、収量を重視する場合は、1 回追肥した農家がある。ただし、中カブのトンネル栽培の場合は追肥が不要である。栽培期間の長い大カブは 1~2 回の追肥が必要なので、基肥と追肥の割合は 1 : 0.3~0.4 である。前作種類と土質、堆肥の投入有無により圃場ごとに大きく異なるので、作付け前に土壌診断を行い、適正な施肥設計が必要である。

石灰質肥料は全面全層施肥を行う。圃場を耕起する前に石灰質肥料を全面撒き、堆肥を使う場合は同時に堆肥も撒き、耕うんを通して作土層に混合させてからうね立てを行う。

基肥はうね内局部全層施肥を採用する。うね立て機などを使って、うねを作ると同時に肥料をうね内に施用し、作土と混合する。

土壌 pH 調整と基肥施用には下記の注意事項がある。

- ① 肥料中の窒素は圃場に施用された後、降雨により流失される恐れがある。また、施用後の時間が経つと土壌のアンモニア化作用や硝化作用により窒素の損失が大きくなり、りん酸が土壌のりん酸固定により難溶化される。あまりに早く施肥することは肥料の利用効率が下がるので、播種の 5~7 日前にうね立てを行い、それに合わせて基肥を施用する。
- ② 未熟な堆肥や硬い固形物のある堆肥は奇形根を引き起こし、収穫物の品質を落とす原因となるので、未熟な堆肥と硬い固形物の堆肥を施用しない。
- ③ 石灰質肥料を使って土壌 pH を調整する場合は、pH が 7.0 を超えないように注意する必要がある。

3. 播種

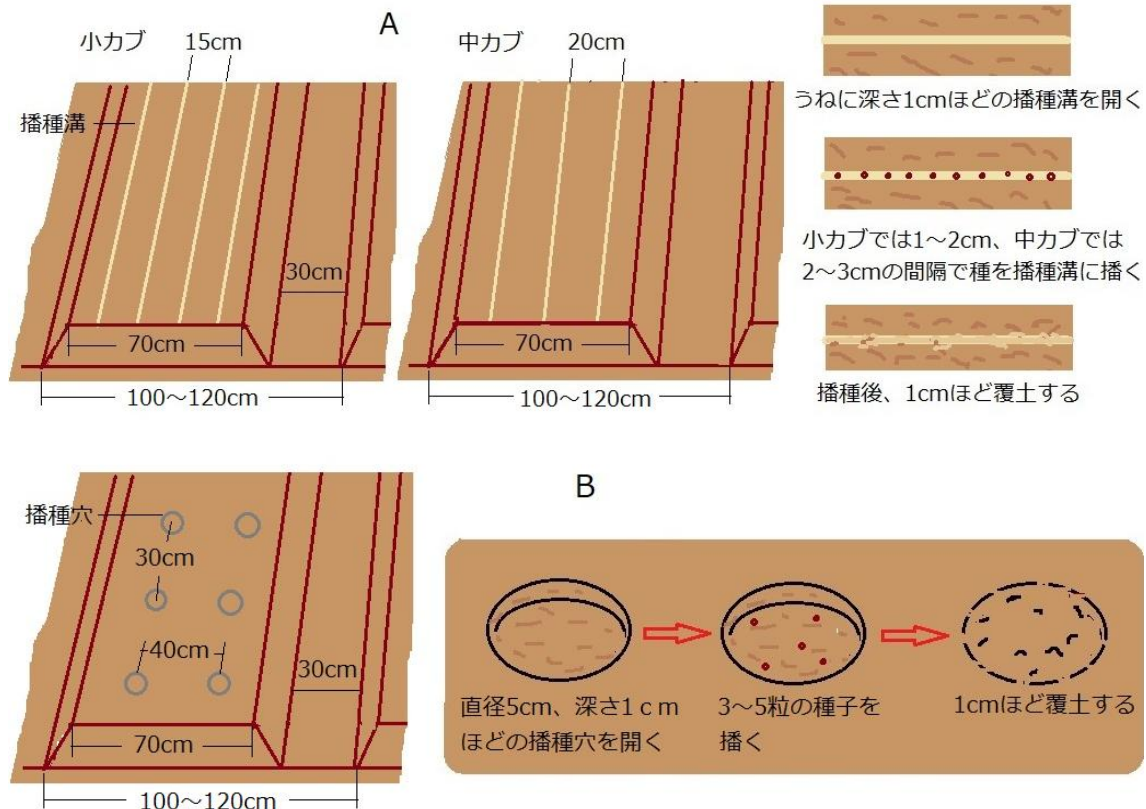
カブは直根性作物で、肥大した主根を収穫するので、必ずうねに直播きにする。移植などで主根に傷つけると肥大できなくなったり、肥大しても奇形になったりすることが発生しやすく、商品率が下がる。

小カブと中カブは条播きとする。小カブはうね面に条間 15cm の間隔の 4 条播きにして、中カブは条間 20~25cm の 3 条播きにする。三角クワの先端か先端の尖った木棒または金属棒で深さ 1cm ほどの細く浅い播種溝を開き、小カブでは 1~2cm の間隔で、中カブでは 2~3cm の間隔で種を播種溝に播いてから 0.5~1cm 程度で覆土し、平クワか手のひらで覆土をしっかり押さえてから水を撒く。その播種の模式図は図 3-A に示す。

大カブは 2 条栽培の穴播きとする。うねに条間 40cm、株間 30cm で直径 5~7cm、深さ 1cm ほどの浅い播種穴を開け、その中に 3~5 粒の種を播いてから 1cm 程度で覆土する。その播種の模式図は図 3-B に示す。

カブの害虫が多く、特に春播きの場合は害虫により大きな被害を受ける恐れがある。また、幼苗期に 10℃以下の低温に遭遇すると、花芽分化が発生し、その後の抽苔が早くなる。た

だし、夜間低温に遭遇しても、日中に 24℃以上の高温によって、低温による花芽分化の効果を打ち消すことができる。従って、防虫と保温のために、春播きはトンネル栽培を勧める。秋播きでは、残暑と害虫の被害を防ぐために、寒冷紗によるトンネル栽培が有効である。



播種には下記の注意事項がある。

- ① 大カブは播種穴に種を播く際に種の間には 2cm 以上の間隔を空ける。種が近すぎると、間引きの際に隣の苗の根を傷つきやすくなる。
- ② 播種後の覆土厚は 1cm 以内にする。厚過ぎると、種子の発芽が悪くなり、欠株が発生しやすくなる。
- ③ 種と土を密接させるため、覆土後、平クワか手のひらで土をしっかり押さえる。
- ④ 発芽を促進するため、播種後 1 回水を撒く。

4. 間引き

播種してから大体 3～5 日後に発芽して、苗が地面に露出する。通常 2 回間引きを行う。小カブと中カブでは 1 回目が播種 5～7 日後、苗が地面に露出して、本葉 1 枚が展開した際に行い、弱小苗、子葉の形状が奇形の苗を抜き、株間を 3～4cm にする。2 回目が播種 15～20 日後、本葉 3～4 枚が展開して、主根肥大期に入る前に行う。2 回目の間引きに合わせて、

小カブでは株間 10cm ほどに生育のよいものを 1 本残して、中カブでは株間 15cm ほどに生育のよいものを 1 本残して、ほかの苗をすべて抜く。図 4-A は小カブと中カブの間引きの模式図である。

大カブも 2 回の間引きを行う。1 回目は本葉 1 枚が展開した際に、形のよい苗を 2~3 本残す。2 回目は本葉 5~6 枚が展開して、主根肥大期に入る際に播種穴ごとに生育のよいものを 1 本残して、ほかの苗を抜く。図 4-B は大カブの間引き模式図である。

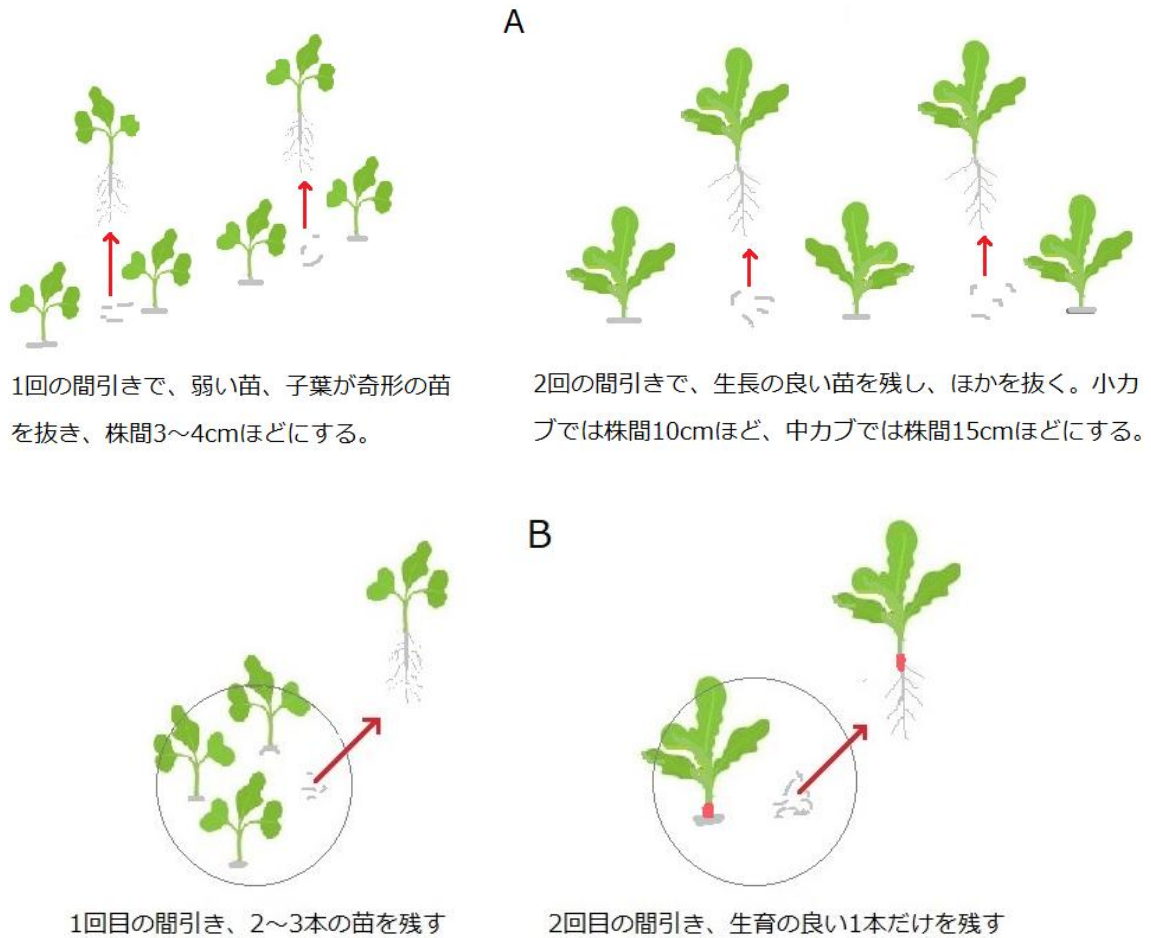


図 4. カブの間引き模式図 (A : 小カブと中カブの間引き、B : 大カブの間引き)

間引きには下記の注意事項がある。

- ① 残りの苗に影響しないように手でしっかり苗を摘まんでまっすぐ上へ抜くか、ハサミで苗の地上部を切る。
- ② 1 回の間引き時に子葉が正ハート形のものは根形がよく、丸形や長方形のもの、傷のあるものは主根が奇形になりやすいので、よく観察して間引きする。
- ③ 残す苗の根を傷付けると、実割れになりやすくなるので、根を傷めないように細心の注意をはらう。

5. 追肥

小カブは栽培期間が 40～50 日しかなく、追肥を行う必要が全くない。中カブの栽培期間が 50～70 日あり、追肥しなくても問題がないが、一部の収量を追求する農家は 1 回の追肥を行う。追肥は、5～6 枚の葉が展開して、幼苗期から主根肥大期が入る頃に 2 回目の間引きの後に行う。時期としては播種後 20 日頃である。10a あたりに窒素だけが 3～5kg を施用する。条間の中央にすじ状に撒く。追肥後の中耕培土により肥効がさらに高まる。なお、トンネル栽培では追肥が不要である。

栽培期間の長い大カブは 1～2 回追肥を行う。1 回目は 2 回目の間引きの後に行い、10a あたりに窒素だけ 3～5kg を条間にすじ状に撒いてから中耕培土を行う。2 回目は播種 40～45 日後に行い、10a あたりに窒素だけ 3～5kg を株の葉に触れないようにうねの両肩に撒く。撒いてから中耕培土を行う必要がない。

追肥作業には下記の注意事項がある。

- ① 肥料焼けを防ぐために肥料を株にかからないように撒く。
- ② 追肥した後、速やかに中耕・培土を行う。ただし、大カブの 2 回目追肥はすでに植株が大きくなり、主根もある程度肥大しているので、施用後の中耕培土が不要である。
- ③ 追肥が遅れると葉ばかりが茂り、根の太りが悪くなる。間引きのタイミングで追肥を行う。中カブは播種後 20 日頃、大カブは播種後 20～25 日頃と 40～45 日頃に行う。

6. 中耕・培土

中耕とは、クワまたは中耕ローター等でうね間を耕うんする作業である。その効果は除草しつつ、固くなった土を軟らかくして空気を入れるほか、地表排水を向上させ、圃場の過湿状態を解消する役割もある。培土（土寄せ）とは、中耕の際にうね間の土を耕起して、うねに覆土する作業である。その役割は葉の徒長を抑え、株を安定させるほか、追肥を覆うことで、肥料利用率を上げる。ただし、カブの培土は薄くて良い。

通常、中耕を行う必要なのは大カブだけで、小カブと中カブには不要である。ただし、中カブが追肥を行った場合は中耕を行った方がよい。大カブでは 2 回目の間引きを終え、植株が 5～6 枚の本葉を展開して、主根肥大期に入る時期に追肥と合わせて行う。中耕を通じて、肥料を隠せるように株元に薄く培土する。図 5 は中耕・培土の模式図である。

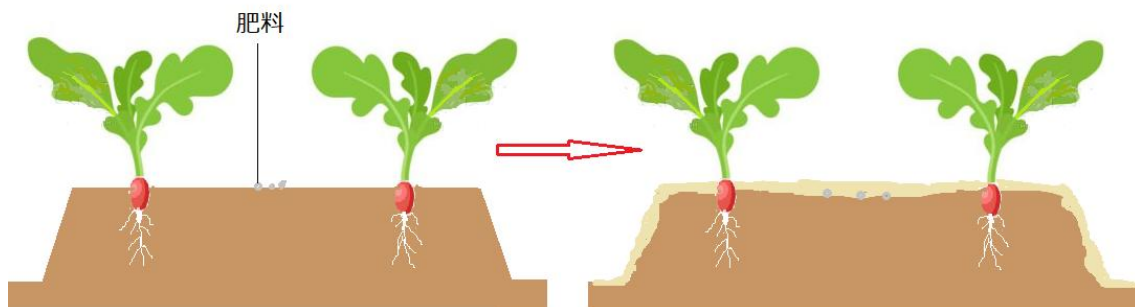


図 5. 大カブの中耕・培土の模式図

中耕・培土には下記の注意事項がある。

- ① 播種後 20～25 日経過して、5～6 枚本葉を展開して、主根肥大期に入った時点で行う。中耕・培土作業が遅いと、展開した葉や肥大している主根を傷付ける可能性がある。トンネル栽培では中耕・培土作業の必要がない。
- ② 培土厚が追肥を隠れる程度で（2～3cm）でよい。厚すぎると、逆に苗の葉を損傷し、茎の生長点を埋めて、株の生育を阻害する。

7. 病害虫と雑草防除

カブは病害虫の被害を受けやすい。被害を受けたカブが減収のほか、葉に病斑や虫の食い穴が残り、商品にならない恐れもあるので、病害虫の防除が肝要である。カブ栽培によく発生する病害虫名と防除法は表 1 にまとめる。

表 1. カブ栽培によく発生する病害虫とその防除法

病害虫名	病原菌・害虫	発生時期・被害症状	防除法
根くびれ病	糸状菌	全生育期間を通じて発生。幼苗期では根が黒く変色してくびれ、葉に萎れが生じる。主根肥大期では主根に淡褐色斑点が発生し、次第に帯状の黒い病斑となって拡大し、くびれる。病斑の表面には亀裂が見られることもある。水はけが悪く、降雨が続く時期に発生しやすい。	連作を避ける、 薬剤散布、罹病株を抜いて圃場外に処分
白カビ病	糸状菌	全生育期間を通じて発生。主に葉に発症し、白色の小さな不整円形の病斑が生じる。病気の進行に伴い病斑が拡大して表皮が破れやすくなる。多湿な環境で感染が広がりやすく、降雨が続く時期に多発。	密植を避け、風通しの良い環境を保つ、罹病株を抜いて圃場外に処分
炭疽病	糸状菌	主根肥大期に発生。葉に初め針頭大、青白色でやや湿ったような斑点を生じる。その後に灰褐色となり、ついには白～灰白色で円形の小さな斑点となって、融合して不整形で周縁が褐色を呈する。古くなると孔があきやすくなる。	連作を避ける、 土壌消毒、薬剤散布
根こぶ病	糸状菌	全生育期間を通じて発生。根部に茶色のこぶができ、次第にざらついた状態になる。生育初期に感染すると、葉が萎れて、生育が衰える。	連作を避ける、 土壌消毒、薬剤散布
黒腐病	細菌	主根肥大期に発生。葉の縁に灰白色や黄白色	薬剤散布

		の V 字の病斑が出現する。春と秋に多発、温暖・多雨が発病を促進する	
黒斑細菌病	細菌	全生育期間を通じて発生。初期は葉と根部に灰色の小さな斑点が見られるようになり、症状が進行すると病斑が拡大して黒色に変色する。根部が腐敗することはないが、内部が褐色や黒色に変色する場合がある。	連作を避ける、 土壌消毒
ヨトウムシ	昆虫	成虫が葉に産卵して、孵化した幼虫が葉を食害する。	薬剤散布
モンシロチョウ(アオムシ)	昆虫	成虫が葉に産卵して、孵化した幼虫が葉を食害し、葉に大きな穴が空く。多発すると葉脈を残して葉が食い尽くされる。	薬剤散布
キスジノミハムシ	昆虫	成虫は葉を食べ、1 mm 程度の穴をたくさんあける。幼苗で多発すると枯死することがある。幼虫は根を食べて傷をつけるため、商品価値が下がる。	薬剤散布
カブラハバチ	昆虫	成虫が葉に産卵して、孵化した幼虫が葉を食害し、葉に大きな穴が空く。多発すると葉脈を残して葉が食い尽くされる。	薬剤散布
コナガ	昆虫	成虫が葉に産卵して、孵化した幼虫が葉表の薄皮を残して食べるため、初めはその部分が白く見え、後に破れて 1~4mm の小さな穴があく。芯葉に潜り込んで葉の生長を止めることもある。	薬剤散布
アブラムシ	昆虫	全生育期間に発生。葉から汁液を吸う。吸汁によって生育不良となるほか、モザイク病を伝播する。	薬剤散布

病気と害虫は圃場を観察して、発生初期からの防除に努める。トンネル栽培では細菌による病気と害虫の被害を軽減させる効果がある。

カブは抽苔までに地上茎が非常に短く、株丈が低いので、雑草との競争に負けることが多い。栽培初期に雑草を徹底的に防除することが肝心である。

カブ畑に発生する主な雑草はほとんど 1 年生草であり、その種類を表 2 に示す。

雑草は除草剤による除草と中耕除草で防除する。通常、初期除草は播種・覆土直後にうね面を避けて、うね間に土壌処理型の除草剤を散布する。その後、間引き時にうね面に発生する雑草を手で抜く。栽培期間中にうね間に発生する雑草は中耕除草または茎葉処理型の除

草剤を植株にかからないように散布する。

表 2. カブ畑に発生する主な雑草

雑草名	スズメノテッポウ、スズメノカタビラ、カズノコグサ、カラスノエンドウ、ヤエムグラ、ネズミムギ、カラスムギ、イヌカミツレ、ヒメシバ、シロザ、スベリヒユ、オオオナモ、ニシキアオイ、イヌホオズキ、マルバルコウ、アレチウリ、タデ類など
-----	--

カブの主根割れ（実割れ）は病気ではないが、商品にならず、減収となる。実割れの症状と原因は下記の通りである。

- ① 根に同心円状の亀裂が入っている場合は、主根肥大期に寒さに遭い、生育が停滞して、その後に再び生育が進むことが原因である。対策はトンネル栽培を採用する。
- ② 実の尻部に亀裂が入っている場合は、土壤水分の変化が激しいことが原因である。対策は土壤の水分状態に合わせて適宜に灌水する。
- ③ 収穫適期を過ぎたことも原因である。小カブと中カブは適期収穫が肝心である。

8. 収穫

小カブは播種後 40～50 日を経過した頃に主根が直径 5～6cm 程度に肥大した時点で収穫する。中カブは播種後 50～70 日を経過し、主根が 8～10cm 程度に肥大した時点で収穫する。収穫が遅れると主根の割れやス入り等が発生し、品質の低下につながるので、適時に収穫する必要がある。大カブは品種により異なるが、主根が直径 12cm 以上、重さ 1kg に達した時点で収穫が可能であるが、スの入りにくい品種では直径 15cm 以上、重さ 2kg になってから収穫する。

カブは傷付きやすく、葉が折れやすいので、機械収穫には不向きで、手での収穫を勧める。両手で葉の根元の部分を持ち、真っ直ぐ上に引き抜くようにして収穫する。大カブでは根が深いため、両手で肥大した主根を持ち、真っ直ぐ上に引き抜く。

9. 調整・選別

収穫したカブは古い葉を取り外し、尻部の細根を切ってから水洗いして、付いている土などを流し落とす。水切りした後、目視で病害虫の害があるものや実割れ、ス入りなどの不良ものを選別・除去して、規格に合わせて 3～5 株を束にして、箱詰めしてから出荷する。